

大人同士としての 親子のつきあい方

—長寿社会の中での親子関係—

大人同士の親子関係が抱える課題

「どうやって子どもに接すればいいのか」「どうやって親と関わっていけばいいのか」。こうした悩みは、従来、幼少期や思春期の親子関係の問題とされてきました。しかし昨今、子どもが成人して以降の親子関係における問題にもなっています。

大人同士の親子関係が抱えている課題とは何なのか。それは一言で言うならば、「自立」と「つながり」を両立させる道の模索ではないかと考えます。つまり、自立しながらも互いにつながり続けるための道を見つけたことが求められていると言えます。

半世紀にわたる親子関係

なぜそのような模索をしなければなら

ないのか。その背景には、平均寿命の延びによる親子関係の長期化があります。いまや日本人の平均寿命は男性79歳、女性86歳となっています。25歳で子どもを出産して80歳まで生きた場合、その子どもとの関係は55年間にわたります。親が45歳時点で子どもが成人した後は、35年間にわたって大人同士として親子がつきあう期間が登場することになります。

子どもが幼少の頃の親子関係は互いの役割や義務が明確ですが、子どもが成人して以降はそれらが曖昧になります。また、かつては長男規範や親孝行の観念などが親子のありようを規定していましたが、今ではほぼ形骸化しています。いわば私たちは、明確なルールがない中で、大人同士の親子のつきあい方を探りて作り上げていかなければならないのです。互いに自立しながらもつながり続けてい

自立とは親からの分離？

くことが必要となりますが、それはなかなか難しいことでもあります。

大人同士の親子関係を扱った本はいくつも出版されていますが、そのうち代表的なものを2つ取り上げてみます。1つは『母が重くてたまらない…墓守娘の嘆き』（信田さよ子著）、もう1つは『親子という病』（香山リカ著）です。信田さんは臨床心理士、香山さんは精神科医の立場から成人して以降の親子関係、特に母娘が抱える問題を取り上げています。

『母が重くてたまらない』は、母親から分離できない娘の葛藤を取り上げ「どこまでもついてくる母親からどう逃げおこせるか。NOと言えないあなたに贈る究極の傾向と対策」を提示しています。『親子という病』でも親と分離できずに

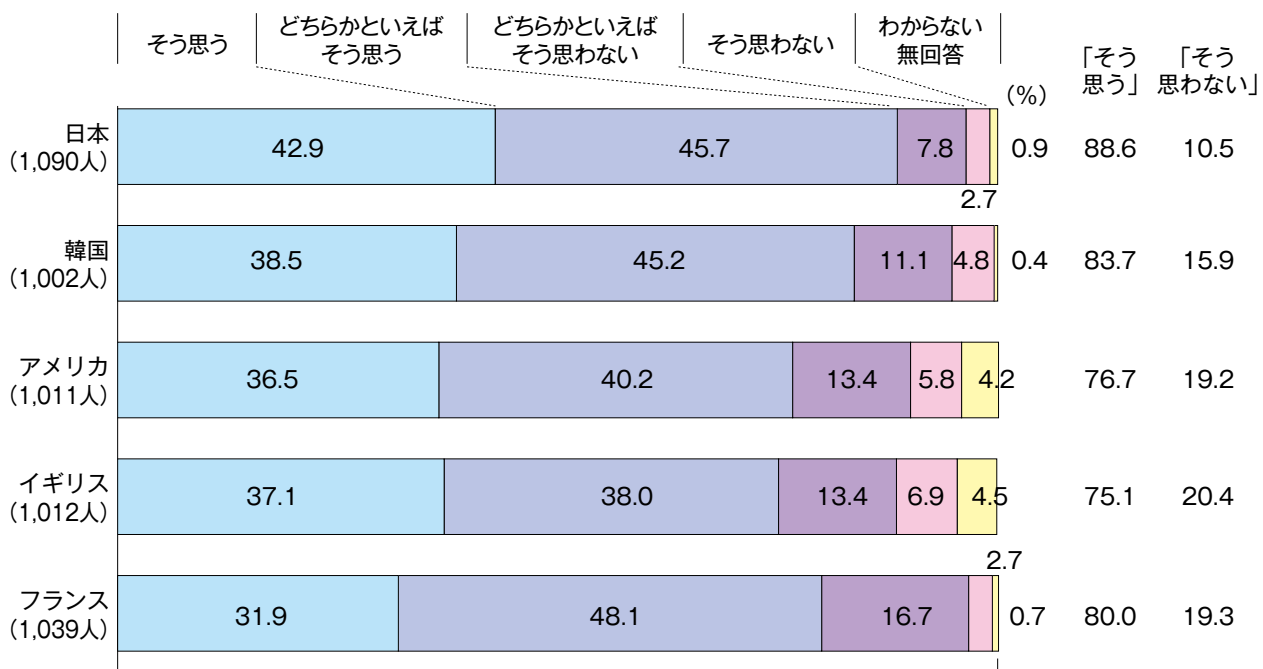


中西 泰子

相模女子大学講師

【なかにし やすこ】2010年より相模女子大学社会マネジメント学科に勤務。著書に『若者の介護意識：親子関係とジェンダー不均衡』（勁草書房、2009年）

図1 親子関係に関する意識「子どもは親から経済的に早く独立するべきだ」5カ国比較



出典：「第8回世界青年意識調査 (HTML)」より
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/2-1-2.html#1>

苦しみ、また苦勞して親を引き離したとしても引き離したことへの罪悪感に苦しむ子の姿が描かれています。どちらも、

親と仲良し≡未熟？

親子が同じようなファッションをして買い物や旅行にいそしむ姿も、「一卵性

成人して以降も子は親からの分離を完全に果たすことができず、そのことで葛藤を抱え続ける現代の親子関係像を描き出しています。

思わず眉をひそめるような様々な事例をもとに、ときに殺人事件なども引き合いに出しながら描かれる親子関係のありようはとても刺激的です。そこでは親子の分離がいかに難しく、いかに親子の自立を阻んでいるのかが強調されています。大人同士の親子関係を扱う著作の多くが、紹介した2冊と同様の内容を展開しています。

しかし、こうした著作では、親から分離することによる「自立」のみが強調されている点が気になります。果たして、親から離れて距離をとることだけが「自立」なのかという疑問が湧いてきます。もちろん、親子が成長にしたがつて一定の距離をとることは必要ですが、一定の距離をとったうえでいかにつながり続けるか、関係を再構築するかも重要なテーマであると考えます。親から離れることの必要性和難しさだけでなく、親とつながり続けることの必要性和難しさも、大人同士の親子関係の課題と言えますが、あまり注目されていないようです。

母娘」や「友達母娘」と言われて否定的な評価を受けてきました。大人同士が楽しそうであっても、成人してからも親と仲良くする姿は単純にはほほえましいものを受けとめられてはいません。それどころか、もしもその子どもがまだ未婚であれば、親が結婚を阻んでいると非難されます。

雑誌AERA(2010/11/1号)の「結婚できる親・できない親」という特集では、親元での楽な関係が結婚を阻んでいると主張されていました。まさに典型例とも言えるでしょう。こうした議論では、親との親密さ≡親との密着であり、親子双方の人間としての未熟さを示すものとして捉えられています。

よく日本は欧米に比べて成人しても親元にとどまり自立を避ける傾向にあると言われたりしますが、必ずしもそうとは言い切れません。青年の意識についての国際比較調査では、親に頼るべきではないという意識が相対的に高くなっています。むしろ、自立に対するプレッシャーが高い社会であるとも言えます(図1)。

しかし、(パートナー以外の)他人に依存せず、親を切り離して生きることが「自立」の達成であり、人間として望ましいあり方だという考え方は、親と子が適度な距離をとりながらつながり続けることを阻害しかねません。こうした傾向は特に男性(息子)によく見られるよう



です。
 次の3つの文章は自分の母親についての
 の思いを書いた20代男性の自由回答で
 す。それぞれの回答から、親から分離し
 なければならぬというプレッシャーが
 成人してからも非常に強いものであるこ
 とが伺えます。

「母の困った顔を見たくはないし、余計
 な心配はしたくないのだ。しかし、いつま
 でたっても母は僕を心配し、僕は母から卒

業するつもりがない」

「極端な話になるが自立を妨げているの
 は母の存在があるからかもしれないと思う」
 「今では母の目が届かないところ」に自分
 が逃げていくこともある。母がいらないと
 は思わない。ただ母の目の届かないところ
 で生きていけるのかを確かめてみたいだけ
 なのだ」

こうした考えを持ちながら、成人後も
 親と親密な関わりを持つことは難しいで
 しょう。また、男性が親子の親密な関係
 から阻害されることは、長期的に見ても
 問題であると考えられます。

「マザコン」男性」という 感覚がもたらす「父親不在」

「マザコン」と聞いて、ほとんどの人
 が女性ではなく男性をイメージするので
 はないでしょうか。例えば女子学生が「う
 ちは親ととても仲がいい、べつたりかも
 しない」と話すとき、その口調は誇ら
 しげであり、周りの学生たちもそうした
 関係が望ましい、うらやましいという雰
 囲気で受けとめています。しかし「彼氏
 が自分と同じように親と仲が良かったら
 どう思う？」とたずねると、多くの女子
 学生は一瞬眉をひそめ、否定的な反応を
 示します。男性は女性よりも強く自立を
 求められるため、親と親密であることに
 対して否定的な評価（「マザコン」とい

うレットル）を受けやすいのです。

いわば、息子は親との親密な関係から
 疎外されがちです。そして、息子として
 の経験は必然的に、その後家庭を作り自
 分自身が親となった際に築く親子関係の
 ありようにも影響していくでしょう。家
 族間のコミュニケーションが大事にされ
 る現在の家族の中で阻害されがちな父親
 のありよう、いわゆる「父親不在」の現
 象は、息子としての家族との関わり方の
 延長にあると考えられます。

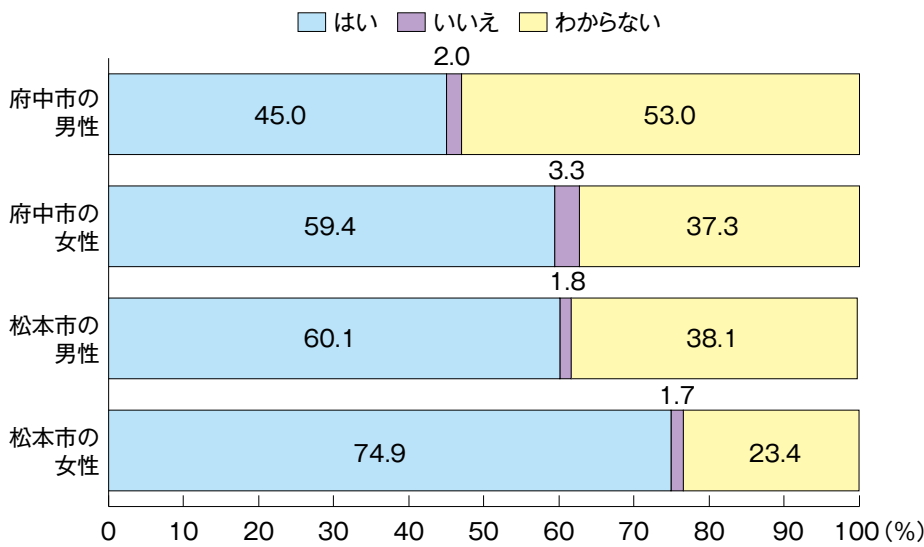
世代間の助け合いの阻害

さらに親子の分離を強調する「自立」
 観は、親子間の適切な助け合いの疎外に
 もつながります。特に親世代は、子に少
 しも依存することはあつてはならない
 と考え、子に助けを求めたり期待するこ
 とを強くタブー視する傾向があります。

「親は子どもに頼らない。子どもも親を
 頼らない。互いに自立できる状況が望まし
 い」(50代男性)
 「全てにおいて、子も親も自立し、お互
 いに頼りあつのは良くないと思う。そこに
 アイデンティティを求めている」(50代女
 性)

「私どもの老後に不安がないわけではあ
 りませんが、何かことが起れば、話がで
 き相談に乗ってくれる子どもたちだと思
 います。もちろん、そんなことを当然だと、期

図2 「将来親の介護をするつもりがありますか」



出典：「若者のライフスタイルと親子関係調査」より
東京都府中市と長野県松本市の20代未婚男女を対象とした調査（2001～2002年）

待たず、頼る気持ちには絶対に持つてはくれないと思っております」（50代女性）

将来の親の介護について子世代の意識を聞いたところ、男性の5割程度、女性の6割以上が「介護するつもりがある」と回答していました（図2）。地域差があることもお分かりいただけるかと思えます。しかし、何らかの形で親の介護に関わろうとしている人が多数派と言えます。

ただし、親と老後のことについて話をしたことがあると答える人は少なく、親が何を考えているかはよく分からないという人が大多数です。「施設に入るから気にしなくていい」と親から言われているのか、どこまで本当にそう思っているのかは分からないという声もよく耳にします。

親に介護が必要な状態になったとき、適切なタイミングで親子双方にとつて納得できる支援ができるかどうかは、それ以前からの親子の意思疎通に左右される部分が大きと言われています。しかし、子が成人して以降は親と子は互いに依存しあうべきではないという厳しい自立観念は、親子が互いに無理のない範囲で助け合うこと、あるいはそうした助け合いの道を探ることを阻害していると言えるでしょう。

「共存型親子関係」に向けて

『親孝行の終焉』（深谷昌志著）という本では、日本のこれからの親子関係は、「密着型」でも「分離型」でもない親子が距離を保ちつつ交流する「共存型」が望ましいと指摘されています。親との関係を密着か分離かだけで把握してしまうと、男性が家族から阻害されやすくなったり、親子が互いに適切に頼りあうことを難しくしてしまいます。

相手に完全に依存してしまうのではなく、適度に依存しながらも自立する関係を

は、実際にはバランスをとることが難しく、自然に何とかうまくいくというものではないと考えます。共存型の親子関係は、親子双方が意識的に作り上げていくものと言えるでしょう。そのための具体的な工夫として、いくつかのことが考えられます。

■具体的なルールを決める

家族は特別な間柄だと考えられていますので、親子は互いに心が通じていて、自然にちよいどいい関係が作れるものであり、ルールなど取り決めるのは他人行儀だという思いもあるかもしれません。

しかし、ルールは親子の関係を固定的な縛ってしまうためではなく、そのつどの相手の思惑の探りあいやすれ違いといった、相手とのつきあいにかかるコストを下げる効果を持っています。つまり、多少ビジネスライクな感じがしたとしても、家事分担や金銭の支払い、訪問の回数や子守、体が弱ったときのサポートなど様々なことについて具体的なルールを決めておくことによつて、自分がどこまでするべきか、相手がどこまでしてくれるべきかについて思い悩むことが減り、相手とのコミュニケーション自体を安定的に楽しむ余裕が生まれてきます。

■相手の話を「聴く」

ルールを決めると言ってもどちらかが

勝手に決めて押しつけるわけにはいきませんので、互いの話し合いが必要になります。ただし、厳しい自立規範の前では、互いに自分の要求が出しにくいことも多々あると想像されます。「どうして欲しい？」と聞いてもすぐに本音が返ってくるとはかぎりません。一回きりの家族会議で、すぐにみんながある程度満足できるルールを作ろうとすると無理がでるかもしれません。

そうした事態を乗り越えるためには、たとえたまにであっても、何かを決めるためではなく、単に相手の話に耳を傾けて聴く機会を設ける必要があると考えます。傾聴ボランティアやお話ボランティアなどでは、地域の高齢者の話を聴くことを活動としていますが、そうした活動では単に相手の話を「聞く」のではなく、相手に寄り添って話を「聴く」ことの難しさとその重要性が注目されています。身内だからこそ難しいという面もあるかもしれませんが、相手の話を聴くということは想像以上に困難なことでもあります。

しかし、相手の意見を否定したり、自分の思考回路に誘導したりすることなく、相手の思いを傾聴することが、親と子の間にも必要であると考えます。

相手の話を聴くことは、互いの距離を近づけるとともに、相手との間に適度な距離をとることもあります。相手が何

を考えているかを自分で勝手に想定してしまうのではなく、相手の話を聴こうとすること自体が、自分と相手を同一視するのではなく一定の距離を置こうとするということでもあります。そして話し手は自分の話を聴いてもらったことで相手に対して親近感を抱き、互いの関係が近しくなります。

実際に、20代のある女性の自分と母親との関係について述べている言葉からも、相手の話を聴くことが、相手と適度な距離をとりつつ、つながり続けていくための要であることが伺えます。

「下宿生活も長くなってくると、2人の関係は少し変わってきている。もちろんマインスに変わったんじゃない。友達に近い関係に思う。私がアドバイスしたり、お母さんの話にじっくり耳を傾けたり、自分のことも言っけど、聞き手になることが多くなっただけ」

■価値観の相対化

親と子の世代間ギャップの中でも、価値観の相違は非常に大きな問題です。双方にとつての「普通」や「常識」が異なることから生じる葛藤は、ルールを決める際の壁にもなります。他人なら「いろんな人がいるから」と許せることでも、自分が育てた子どもなのに価値観が食い違うということは受け入れ難いことであると思

われます。また子どもも自分の親を自分に都合の良いように理想化しやすいため、自分が望ましいと思う価値観に親が否定的である場合、他人に対してよりも激しい反感を感じやすい傾向が見られます。

こうした状況に対して特効薬的な方策があるわけではありません。しかし、親子が互いの価値観の相違を認めにくい傾向にあることを客観的に認識しておくことが、まず必要ではないかと考えます。

親子だけで暮らしているわけではない以上、友人や学校、職場、パートナーの考え方などで、親と子の価値観が異なることは珍しくありません。自分の思う「普通」や「常識」が、相手にとつてのそれではないことを前提とする必要があるでしょう。無理に共感しようとしなくても、理屈として認識し、話し合いの際に「普通」でしよう」「～するのが当たり前だ」といった言葉を控え、「私は～と思う」「自分にとつては～だ」という言い回しを使うだけでも、相手との間にできる溝の深さは各段に違ってくるのではないでしょう。

具体的な方策として挙げたこれら3つは、どれも親子が個人同士として分かり合っていくためのものです。最終的に大人同士の親子関係がどのような「形」になっていくのか。おそらくその「形」は一様ではなく、多様なものになると思われ